

中国語の語素と単語（下）

—中国語教学文法の再構築を目指して—

Morpheme and Word in Chinese (Part Two)

—In order to reconstruct Chinese Pedagogical Grammar—

鳥 井 克 之

TORII Katsuyuki

爲了進一步鞏固和確立新的教學語法系統而回顧過去的許多語法著作的看法以後，在此提出了教學語法系統具體的內容。這次對有關語素和詞的問題考察以後，得出了下面的結論。即：語素是最小的語音語義結合的，構成詞的語言單位。語素分爲詞根和詞綴，詞根分爲成詞語根和非成詞語根，詞綴分爲前綴和後綴；詞是由語素組成的，最小的能够獨立活動的有意義的語言單位。詞分爲單純詞和合成詞，單純詞分爲單音單純詞和複音單純詞，合成詞分爲由詞根和詞根組成的以及由詞根和詞綴組成的，前者分爲聯合式、偏正式、補充式、述賓式和主謂式。後者分爲由前綴和詞根組成的以及詞根和後綴組成的。

キーワード

語根(stem)、接辭(affix)、單純語(simple word)、合成語(compound word)、構語法(word formation)

前稿「中国語の語素と単語（上）」（『関西大学文学論集』49巻1号所収）の「結語」において、『I-1-1とI-2-1およびII-1-1とII-2-1のそれぞれの「まとめ」から次のような「結語」が導き出される。すなわち日本における中国語教学文法においては「語素は単語を構成する、最小の意味を有する言語単位である」また「単語は語素によって構成される、独立して運用できる最小の意味を有する言語単位である」と定義される。』と総括し、さらに「語素の種類および単語の種類とその構造については次回で考察する。」と記したので、本稿は語素の種類と単語の種類とその構造について論じることとする。

Ⅳ 語素の種類とその構造

Ⅳ-1 語素の種類

語素の種類についてはすでにその語彙的意味および位置的特徴による分類を「I-2 『詞根』『詞綴』『前綴』『後綴』などの定義」および「I-2-1 『詞根』『詞綴』『前綴』『後綴』

のまとめ」において考察した。その結果、筆者は朱徳熙(1982)の説に準拠して、まず単独で(語素それ自体で)単語になりうるか否かにより、単独で独立して単語となれない【不成詞語素】と単独で独立して単語となりうる【成詞語素】に分ける。そうすることにより【詞根(語根)】と呼ばれる語素もまた【不成詞語素】と【成詞語素】にさらに詳しく分類することが可能となるからである。次に【成詞語素】と【不成詞語素】のいわゆる【詞根・語根】が朱徳熙(1982)のいう合成語を構成するときの語素の位置が一定していない【不定位語素】であり、【不成詞語素】から【詞根・語根】を排除した剰余の【不成詞語素】が合成語を構成する際の位置が特定されている語素すなわち【定位語素】であり、いわゆる【詞綴(接辞)】となる。【詞綴】はさらにその位置により【前綴(接頭辞)】と【後綴(接尾辞)】に分類される。なお、教学文法においては朱徳熙(1982)の単独で独立して文となりうるか否かによる語素の分類概念である【成句語素・自由語素】と【不成句語素・粘着語素】により、【成詞語素】を【実詞】性と【虚詞】性に分類している説は採用しない。なぜならば特定の文イントネーションを伴って単独の単語が独立して文となるいわゆる【獨詞句(一語文)】は説明可能であり、かつ現在では公認され定着しつつあるが、語素が単独で文となりうるという記述文法的発想を教学文法に導入すると、【詞(単語)】と【詞素(語素)】の根本的差異が不明瞭になるからである。

IV-2 語素の音節数

ここでは特に語素の音節数による種類について論及するものである。

音節数を基準にすれば、単音節、双音節(二音節)、多音節(三音節以上)に分類される。

表面的にはきわめて単純に分類し得る基準である。しかし、その前提には与えられた言語単位が語素であることが明白であることを与件としている。しかしはじめて中国語を学ぶ非中国語圏の学習者にとっては、たとえ句読点があっても漢字の行列している文章を単語ごとに区切ることさえ難しいことであり、ましてや語素毎に区切って単音節語素、双音節語素、多音節語素を抽出することはさらに容易なことではない。それらを区別して指摘することは換言すれば、単音節語素を抽出することは単音節単純語を、複音節(双音節と多音節を包含する概念)単純単語、すなわちその多くは古代から近代までの中国語に受容された外来語をそれぞれ抽出する作業である。単音節単純語については陸志章編著《北京話単音詞詞彙》(1956年:科学出版社)にその具体例を見ることができる。ただし「兒」接尾辞のついた単音節語(語根+接尾辞=合成語)も北京語ゆえに多く採録されていることに注意しなければならない。また「双音節単純語」の多くは西域やインド仏典などを源流とする古代中国語の外来語であり、多くは【連綿語】【双声語】【疊韻語】【疊音語】【音訳語】となっており、多音節単純語の多くは欧米文化を受容した近代中国語の外来語であり、そのほとんどが【(多音節)音訳語】となって具現化されているので、ここでは単純に一字で構成される単音節語素、二字で構成される双音節語素、三字以上で構成される多音節語素の3種類に分類されると提起するにとどめる。具体的な説明は「V

単語の種類とその構造 V-3 単純語」において詳細に述べることにする。

V 単語の種類とその構造

単語の定義については前稿末尾の「まとめ」において「単語は語素によって構成される、独立して運用できる最小の意味を有する言語単位である」と述べただけで、それ以上のことには論及していないので、ここで「V 単語の種類とその構造」を設けた次第である。

単語の種類はその音節数により、単音節語、複音節語に分けられ、複音節語はさらに双音節語、多音節語に分けられる。また単語の種類はその表す意味内容により、1個の語素で構成される単純語と2個以上の語素で構成される合成語に二分される。しかしながら合成語は2個以上の語素で構成されるために、そのほとんど大部分が複音節語である。ただ先にも指摘したように「(1個の)語根+「兒」接尾辞」型合成語のみが1音節を形成する唯一の例外である。他方、単純語は1個の語素で構成され、語素はその多くが1字つまり1音節で構成されるので、単純語の多くは単音節語であり、また先に指摘したごとく、複音節単純語のほとんど大部分は外来語の【音訳語】であり、単純語における外来語の比重は日本語のそれほど大きくはない。したがって、概括的にいえば、「単音節語≒単純語、複音節語≒合成語」となるので、単語の種類はまず表す意味内容を基準とする単純語と合成語に分けて論述することにし、単音節語と複音節語については副次的に論及する。

単語の構造については、1個の語素によって構成される単純語の構造はその語素を構成する音素の構成ないし音韻的構造の問題でしかありえないので、先に挙げた【連綿語】【双声語】【疊韻語】【疊音語】【音訳語】において論及するしかない。それに対して2個以上の語素によって構成される単語の構造、つまり構語法は合成語の文法的構造の問題が中心となる。

まず単語の種類を単音節語と複音節語および単純語と合成語に分けて論述する。

単語は音節数により単音節語（1音節語）と複音節語（2音節以上の単語）に分けられ、複音節語はさらに双音節語（2音節語）と多音節語（3音節以上の単語）に分けられる。

V-1 単音節語

単音節語には【単音詞】の術語が用いられている。

呂叔湘(1942)は【単音綴詞】とも称し「音節1個の単語は単音節語と称する」(p6)と、王力(1943)も「若干の単語は1字で構成されるものであり、我々はそれらを単音節語と呼ぶことができる」(p8)と、張志公等(1959)は【単音節詞】と呼び、「単音節語は「人(ひと)、牛(うし)、馬(うま)、走(歩く)、飛(飛ぶ)、紅(赤い)、黄(黄色い)、一(いち)、二(に)」などのように1音節で構成される単語である」(p127)と、丁声樹等(1961)は「ある単語は1字のものであってもよいし、また2字あるいは数個の字であることもできる。1字が通常1音

節を代表するので、1字の単語は単音節語という」(p218)と、胡裕樹等(1979)も「単音節語とは1個の音節によって構成される単語である」(p219)と、黄伯榮等(1980)は『單音節詞』と称し「単音節のもの、例えば「空(空)、江(大川)、寫(書く)、看(見る)、紅(赤い)、三(さん)、我(私)、不(～でない)、啊(アー)など」とそれぞれ説明している。

V-2 複音節語

複音節語には『複音詞』という術語が用いられている。

呂叔湘(1942)は『複音綴詞』とも称して「2個あるいはそれよりさらに多い音節のものは多音節語と称する」(p6)と、王力(1943)も「2個以上の字で構成される。複音節語には2音節語(例えば「葡萄(ブドウ)」、3音節語(例えば「圖書館(図書館)」、4音節語(例えば「帝國主義(帝国主義)」)を含む」(p11)と、張志公等(1959)は3音節以上の単語を特に『多音節詞』と呼び、「多音節語は科學者(科学者)、計算機(電算機)、電化教育(AV・LL教育)、政治經濟學(政治経済学)、唯物辯證主義(唯物弁証法)などのように、3個あるいは3個以上の音節により構成される単語である」(p127)と、丁声樹等(1961)は「1個の字は通常1個の音節を代表するから、1字の単語は単音節語といい、2字の単語は2音節語といい、3字、4字の単語はそれぞれ3音節語、4音節語という。2音節語、3音節語、4音節語は複音節語と総称する」(p218)と、胡裕樹等(1979)も「複音節語とは2個あるいは2個以上の音節で構成される単語である」(p219)とそれぞれ定義している。

V-3 單純語

単語はまた包含される語素の数により、1個の語素しか包含しない單純語と2個以上の語素を包含する合成語に2大別される。

單純語は一般的に中国語では『單純詞』という術語を用いており、高名凱(1949)は「單純語とは1個の語根あるいは語素からなる単語であり、それはまた付加成分(接辞)が付加されることもできるが、語根は1個しかない。『好(よい)』がとりもなおさずその1例である」(p98)と、張志公等(1959)は「1個の字からなる単語が單純語であり、2個あるいは数個の字が構成する単語でも、その中のそれぞれの字がいずれも意味を表さず、ただ合体して初めて意味を持つものもまた單純語である。「螳螂(カマキリ)」「吩咐(言いつける)」「玲瓏(細工が精巧である、利口である)」「托拉斯(トラスト)」「阿斯匹林(アスピリン)」などがそれである」(p24)と、胡裕樹等(1979)は「1個の語素によって単独で構成される単語は單純語という。たとえば「人(ひと)」「少(少ない)」「向(～に向かって)」「芙蓉(ふよう)」「疙瘩(こぶ)」「馬達(モータ)」「白脱(バター)」「托拉斯(トラスト)」「法西斯(ファシズム)」「布爾什維克(多数派)」などである」(p220)と、張静等(1980)も「1個の語素によって構成される単語は單純語といい、この単語は単音節のものであってもよいし、また複音節のものであってもよい」

(p90)、黄伯榮等（1980）は「単純語を「単音節」のもの」と「複音節」のもの」の2種類に分ける。複音節のものには連綿語、音訳された外来語と疊音語が含まれる」(p223)と、朱徳熙(1982)もまた「1個の語素によって構成される単語は単純語という。例えば人(ひと)、我(私)、葡萄(ブドウ)である」(p11)とそれぞれ定義している。とくに黄伯榮等（1980）は3種類の複音節語単純語について論及している。次にそれらについて考察することにする。

V-3-1 複音節単純語

呂叔湘（1942）は複音節単純語を『單純性的複音綴詞』と称して「複音節単純語は、すなわち前人の言うところの『聯綿字』である。この種の単語は前人から下された定義は「2字が合して1語となりしが、その実は1字なり」であるが、我々の今の言い方によればつまり「2個の音節が合体して（2字を書き上げて）1語となり、単一の意味を具有する」ということである。いわゆる単一の意味とはもはやそれ以上に分析不可能ということである。この種の単語は往々にして双声（声母が相同じ）あるいは疊韻（韻母が相同じ）であるが、また「双声・疊韻」でないものもある」(p8)と述べ、また疊音語を『疊字』と称して「疊音字とは前人の言う『重言』の事である。この種の複音節語は形容詞や副詞が最も多く、また2種類に分けられる。すなわち重ねなければ用いることのできないものが1種類、重ねなくとも用いることのできるものが他の1種類である」(p8-9)と続け、さらに音訳語については『譯音詞』の術語を用いて、「ある言語は通常他の言語から多くの語句、とりわけ事物の名称を移入する。中国語にもこの様な多くの例がある。訳語には意識と音訳の二種類ある。意識された単語はその言語に固有の単語あるいは語根を利用して結合させているので、『合義複詞（合成語）』に帰属させべきであり、かつまた厳密な意味で外来語とみなすべきでない。音訳された単語は渾然一体となっており、分離できないので、『衍聲（敷衍された音節）』の種類に属する。ここに数例を挙げるにとどめる」(p13)と指摘している。高名凱（1949）は『純粹的多音詞』と称して「この種の複音節語は疑問を抱く人がいないものである。なぜならば、2個の音節を切り離すと、少しの意味もなくなり、それはただその同一の単語の発音の一部分にしかかなれないからである」(p28)と、張志公等（1959）は『聯綿字』と呼び「連綿語は2音節語素である。このような語素においては、それぞれの音節はいずれも意味を表さず、必ず2個の音節が一つに接続して初めて意味を表し、一つの語素とならなければならない」(p119)と、張静等（1980）は「枇杷(ピワ)、蜘蛛(クモ)、秋韃(ブランコ)——これらは声母が同じ2個の音節によって構成された双声連綿語である。玫瑰(バラ)、葫蘆(ひょうたん)、駱駝(ラクダ)——これらは韻母が同じ2個の音節によって構成された疊韻連綿語である。玻璃(ガラス)、囫圇(完全無欠だ)、馬虎(出鱈目だ)——これらは非双声疊韻語である」(p91)と、黄伯榮等（1980）は簡潔に「連綿語とは、2個の音節が連結されて意味を成すが分解すると使用不可能な単語である。その中には双声のもの、疊韻のもの、非双声疊韻のものがある」(p223)とそれぞれ定義している。

V-3-2 連綿語

連綿語は上に見たとおり、双声語、疊韻語、非双声疊韻語の3種類がある。

V-3-2-1 双声語

馬建忠 (1898) は『双聲状字』と称して「流離 (離散する)、留連 (ぶらつく)、顛倒 (あべこべにする)、; 躊躇 (ためらう)、蜘蛛 (クモ)、髣髴 (あたかも)」(p231)などを挙げている。胡裕樹等 (1979) も「双声語とは声母が同じ2個の音節によって構成された2音節語である」(p220)と、黄伯榮等 (1980) も「双声のものとは、2個の音節の声母が相同じ連綿語を指す」(p223)とそれぞれ定義して例語を挙げている。

V-3-2-2 疊韻語

馬建忠 (1898) は『疊韻状字』と称し、呂叔湘 (1942) は『疊韻』と呼び「状態を形容するもの」と「事物を表すもの」(p8)に分け、胡裕樹等 (1979) は「疊韻語とは韻母が相同じ2個の音節によって構成された2音節語である」(p220)と、黄伯榮等 (1980) は「疊韻のものとは、2個の音節の「韻」が相同じである連綿語を指す」(p223)とそれぞれ例語を挙げ定義している。

V-3-2-3 非双声疊韻語

非双声疊韻語について特に取り立てて単独で定義しているものではなく、V-3-1で連綿語について説明した呂叔湘 (1942)、張静等 (1980)、黄伯榮等 (1980) で論及されているだけである。

V-3-3 音訳語

音訳語は『譯音詞・譯音的外來詞』という術語が用いられている。呂叔湘 (1942) はV-3-1で紹介したように外来語について定義した後、「珈琲 (コーヒー)、可可 (ココア)、香檳 (シャンパン)、加利 (カレー)、吐司 (トースト)、雪茄 (シガー・葉巻); 以上食物。德律風 (テレフォン・電話)、開麥拉 (カメラ)、梵啞鈴 (ヴァイオリン)、沙發 (ソファー)、司的克 (ステッキ・杖); 以上用具。打 (ダース)、磅 (£)、噸 (t); 以上度量衡單位」を挙げ、さらに半分音訳半分意識の外来語 (合成語) の例を挙げている。高名凱 (1949) は「外国語の音訳。この種類の複音節語は第1類と同様に、1字1字はいずれも意味のないものである。しかし、それらは外国語を来源とする単語である。ある多くの単語は中国人がすでに十分に使い慣れており、中国語と同じである。ある若干の単語の音節は多く、純粹の中国語にはないものである。例えば、邏輯 (logic)、幺匪 (unit)、浮屠 (buddha)、烟士披裏純 (inspiration)、摩登 (modern)、沙門 (sramana) 菩薩 (bodhisattva) がそれである」(p29)と説明している。張志公等 (1959) は「これら外来語は、多くは音訳法を採用し、そのようにして訳されてきた後、2音節語素あるいは多音節語素となる。例えば、葡萄 (ブドウ)、苜蓿 (馬ゴヤシ)、石榴 (ザクロ)、菩薩 (ボサツ)、羅漢刹那 (ラカンシャナ)、茉莉 (ジャスミン)、安培 (アンペア)、加侖 (ガロン)、歐姆 (オーム)、婆羅門 (バラモン)、凡士林 (ワセリン)、白蘭地 (ブランディ)、巧克力 (チョコレート)、奧林匹克 (オリンピック)、阿斯匹林 (アスピリン)、盤尼西林 (ペニシリン) であ

る」(p120)と述べている。張静等(1980)は「音訳語 雷達(レーダ)、珈琲(コーヒ)、檸檬(レモン)、吉普(ジープ)、沙發(ソファー)、法西斯(ファシズム)、山道年(サントニン)、尼古丁(ニコチン)、蘇維埃(ソヴィエト)、麥克風(マイクロフォン)、奧林匹克(オリンピック)、歇斯底裏(ヒステリー)、布爾什維克(ボルシェヴィキ・多数派)、英特納雄納爾(インターナショナル)。これらの単語はいずれも他の言語の中から音訳されてきたものであり、それらは他の言語における発音を漢字で表記したものである。このような単語にあつては、漢字はただ発音を表すだけであり、いかなる意味も表していない」(p92)と述べている。黄伯榮等(1980)は『音譯的外來語』と呼んで「珈琲(コーヒ)、沙發(ソファー)、巧克力(チョコレート)、安乃幾(アナーキ・無政府)、葡萄(ブドウ)、歇斯底裏(ヒステリー)、布爾什維克(ボルシェヴィキ・多数派)」(p223)を例語として挙げている。

IV-3-4 疊音語

馬建忠(1898)は『重言』という術語を用いて「言を重ねるものあり」(p231)と述べて「累累、鬱鬱、默默、卒卒、淵淵、洞洞」など例語19語を挙げている。金兆梓(1922)は『疊詞』という術語を用いて「世界の原始的言語(Primitive Language)にはすべて単語を重ねること(reduplication)により語義の(表現)力を増幅させるという現象が見られる。例えば「人人」(man-man)は人が多いことを指して言い、「大大」(big-big)は極めて大きいを意味することを言う。これを始祖的アーリア語族(Parent Arian)の言語に参照すると、動詞はその過去形(past time)によって語気を強めることは、疊音語の例によって解説されている。現在の中国語の文章においては、上記の「人人」「大大」以外に、「多多」「屢屢」「日日」は、英語の「more and more, again and again, day and day」と同様にいずれもやはり極めて普通に用いられているものである」(p27-28)と説明している。呂叔湘(1942)は先に見たごとく『疊字』と言う術語を用いていたが、王力(1943)もまた『疊字』と言う術語を用いて「相同じ2個の字が重ね連なるものは疊音語という。疊音語は4種類に分けられる。(1)2字を重ね合わせて名詞となる：爸爸(お父さん)媽媽(お母さん)哥哥(お兄さん)嫂嫂(兄嫁さん)弟弟(弟)姐姐(お姉さん)妹妹(妹)。(2)2字を重ね合わせて動詞となる：癢癢(むず痒い)。(3)2字を重ね合わせて形容詞となる：小小的花園(小さい花園)要大大的慶祝一番(大々的に一度お祝いをしたい)。(4)2字を重ね合わせて副詞となる：細細(ほっそりした)剛剛(今しがた)漸漸(次第に)斷斷(決して)各各(おのおの)每每(それぞれ)」(p284-286)と説明しているが、これらのほとんどは単純語ではない。胡裕樹等(1979)は『疊音詞』を術語として「疊音詞とは2個の相同じ音節が重ね合わせてできた2音節語である。例えば猩猩(オランウータン)饜饜(マントー)往往(しばしば)紛紛(しきりに)惺惺(頭脳がはっきりしている)隆隆(ゴウゴウと)潺潺(サラサラと)孜孜(せつせと)である」(p220)と説明し、張静等(1980)も『疊音詞』を術語として「疊音詞——爸爸(お父さん)、媽媽(お母さん)、爺爺(父方のおじいさん)、奶奶(父方のおばあさん)、哥哥(お兄さん)、姐姐(お姉さん)、娃娃(赤ちゃん)、

公公(舅)、婆婆(姑)、叔叔(父の弟・おじさん)、姑姑(父の姉妹・おばさん)、孜孜(せつせと)、悠悠(ゆうゆうと)、茫茫(広々としている)、熊熊(火がぼうぼうと)、翩翩(ひらひらと)、依依(なよなよと・別れを惜しむさま)、津津(興味・味わい等が深いさま)、滔滔(とうとうと=よどみなく)、振振(もっともらしく)、切切(くれぐれも)。この種の単語は(同じ)1個の音節を重ね合わせたものである」(p91)と述べ、黄伯荣等(1980)も『疊音詞』を術語として「疊音詞とは、2個の同じ音節が重ねられて構成される。例えば、猩猩(オランウータン)、姥姥(母方のおばあさん)、饜饜(マントー)、悄悄(こっそりと)である」(p223)と簡潔に説明している。

V-4 合成語

合成語は現在では一般的に2個以上の語素で構成される単語であると定義されているが、これまでの主な定義を見ると次のようである。

呂叔湘(1942)は『複詞』または『合義複詞』という術語を用いて「複合した単語はただ最小の表現単位であるに過ぎず、最小の意味単位ではない」(p7)とした上で、「合成語は2種類に分けることができる。1種類は我々がそれを『聯合式』と称し、他の1種類はそれを『組合式』と称する。聯合式の例は道德(道徳)、法律(法律)、文章(文章・論文、含み、策略)、方面(側面)、地位(立場、場所)、城市(都会)、戸口(戸数と人口、戸籍)、親戚(親戚)、息女(息子と娘)である。組合式の例は鶏湯(鶏肉スープ)、粉筆(チョーク)、茶杯(湯呑)、風燈火(カンテラ)、後門(裏門、コネ)、晩飯(晩飯)、飛機(航空機)、捐款(献金する・寄付金)、望遠鏡(望遠鏡)、中立國(中立国)である」(p13)と、王力(1943)は『複合詞』という術語を用いて「2個の単語が複合してできたものなので、我々はそれらを合成語と呼ぶ」(p10)と、高名凱(1949)も『複合詞』という術語で「複合語は2個の単語が結合してできたものである。複合と命名しているからには、それは本来的に自ずと2個の単語である」(p29)と述べた後、さらに「複合語は2個あるいは2個以上の語根あるいは語素が結合して一体となり構成された1個の単語である。「中國」がすなわちその1例であり、それは「中」と「國」で構成された1個の単語である」(p98)と、張志公等(1959)は『合成語』という術語を用いて「2個あるいは2個以上の字で組み立てられた単語は、それぞれの字がいずれも若干の意味を表し、合体して1個のまとまった意味を表すもので、『合成語』と称する。例えば、「模範(手本・模範となる人または事物)」、「學習(学ぶ)」、「飛快(飛びように速い)」、「照相機(カメラ写真機)」、「集體化(集団化する)」等である」(p24)と、胡裕樹等(1979)も『合成詞』を術語として「数個の語素によって合成された単語は合成語という。例えば、意義(意味)、胖子(デブ)、拖拉機(トラクタ)、自行車(自転車)、社會主義(社会主義)である」(p221)と、張静等(1980)も『合成語』を術語として「2個以上の語素によって構成された単語は合成語と称し、この単語は必ず複音節のものである」(p90)とし、さらに「合成語はすべて2個以上の語素が構成す

るものである。合成語内部における各語素はいずれも一定の関係を持ち、かつすべて一定の文法法則に基づいて配列されている」（p92）と、黄伯榮等（1980）も『合成語』を術語として「2個あるいは2個以上の語素によって構成される単語は、合成語と呼ばれる」（p223）と、朱德熙（1982）は『合成詞』と『複合詞』の2種類の術語を使い分けて「2個あるいはさらに多い語素によって構成される単語は合成語といい、人民（人民）、履歴（履歴、履歴書）、我們（私たち）」（p11）と述べ、さらに「複合とは2個あるいは2個以上の語根成分を合成語に組立てる構語方式である。複合という方式によって構成された合成語は複合語という。中国語の複合語構成成分間の構造関係は基本的には構文構造関係と一致するものである。構文構造関係には主述、述目、述補、修飾、連合等々があり、絶対多数の複合語もまたこの数種類の構造関係に基づいて構成されたものである」（p32-33）とそれぞれ定義している。

V-4-1 主述式合成語

2個の語素のうち、前の語素が主語、後の語素がその述語という関係で構成された合成語を指すが、これまでの定義を見ると次のようである。

高名凱（1949）は『句子形式的複合詞構詞法（文形式的複合語構語法）』という名目で「時には、すでに文になっている言語構造がただ1個の単語に等しく、1個の意味しか明示しない。このようなケースこそ文形式構造の複合語構語法である。このような複合語構語法には2種類のケースが含まれる。1種類は「龍虎鬪（食物の一種）」のようなものが純粋な文形式的複合語構語法である。すなわち「龍虎」が並列関係の主語であり、「鬪」が述語であり、すでに1個の文であるが、かえって1個の単語として用いられている。他の1種類は「心心相印（気持ちや考えが通じ合う）」のような文形式の諺であり、「心心」が主語であり、「相印」が述語であり、すでに1個の文であるが、ある時にはかえって「心心相印は我所最希望的（お互いに心が通じ合うことが私の最も希望するところである）」のように1個の単語として使用されている」

（p101）と、丁声樹等（1961）は『主謂式』という術語を用いて「ある単語の前後2個の成分関係があたかも主語と述語という関係のものは主述式という。たとえば、霜降（24節季の一つ＝そうこう）、春分（24節季の一つ＝しゅんぶん）、地震（地震）；心疼（惜しむ）；年輕（若い）、肉麻（歯が浮く）、眼紅（ほしがる、顔色が変わる）である」（p220）と、胡裕樹等（1979）は『陳述式』と称し「語根の間には陳述と被陳述の関係がある。この種の単語は前の語根が陳述される対象であり、後の語根は陳述する部分である。例えば、頭痛（頭痛）、眼花（目がかすむ、くらむ、ちらつく、回る）、心虚（びくびくする、心細い）、肝怯（おじける）、心細（細心である）、性急（せっかちだ）、年輕（若い）」（p225）と、張静等（1980）も『主謂式』と称して「海嘯（津波）、雪崩（雪崩）；面熟（見覚えがある）、自信（自信がある、自身過剰だ）；國營（国营）、民辦（民营）；眼熱（うらやましがる）、手軟（気力がなくなり手が鈍る）；この種の合成語は、2個の語根には陳述と被陳述の関係があり、前の1個の語根が陳述されるものであり、後の1個が陳述するものである。それらの構成方式は主述句に極めて似ている」（p93）と、黄伯

柴等 (1980) は『主謂型』と称して「前の語根が陳述される事物を表し、後の語根が前の語根を陳述するものである。例えば、日蝕(日食)、民主(民主的だ)、月亮(月)、自衛(自衛する)、自決(自分で決定する)などである。この種の合成語は、あるものは見たところ結合がそれほど緊密でない様に考えられるが、それは例えば「霜降」が節季の名称であるように、単一の概念を表すので、当然合成語と見なすべきである」(p225)と、朱徳熙(1982)も『主謂式』と称して「名詞：冬至(節季の一つ)、霜降(節季の一つ)。動詞：地震(地震が起きる)、心疼(惜しむ)、耳鳴(耳鳴りがする)、嘴硬(口が減らない)、例如(例えば)、形容詞：面熟(見覚えがある)、理虧(筋が通らない)」(p32)とそれぞれ例を挙げて説明している。

V-4-2 述目式合成語

前の語素が述語動詞で、後の語素がその目的語という関係で結合した合成語である。以下にその定義の変遷を見てみよう。

高名凱(1949)は『引導結構的複合詞構詞法(支配構造的合成語構語法)』と名づけて「2個あるいは2個以上の単語に引導関係(あるいは支配関係)が発生したために、合成語を構成したものは、引導関係(あるいは支配関係)的合成語構語法と呼ぶ。例えば、「扶」と「手」に引導関係(あるいは支配関係)が発生すると、「扶」という動作は「手」に引導(あるいは支配)され「手」は「扶」の動作を手それ自身に導かせてくる。;「扶」と「手」は本来から2個の独立した単語であるが、「扶手」というこの構造の中においては、それらにかえて引導関係(あるいは支配関係)が発生し、かつ1個の合成語(椅子的扶手・椅子の取っ手)を構成する。この種の合成語の例語には、扶手(取っ手)、拖鞋(スリッパ)、噴氣(ジェット)、領港(水先案内人)、烙餅(食物の1種)、包手(手に包帯する)、管家(執事)、吸角(すいたま:漢方療法の一種)、取耳(耳掃除する)、騎牆(二股膏藥)、修辭(レトリック)、切口(隠語)、司機(運転手)、刑天(神話上の人物)、切音(表音する)、抱厦(母屋のひさし)、拍花(児童誘拐)、枕頭(枕)がある」(p100)と、張志公等(1959)はその他の合成語の1種とし、特に命名せずに「前の字が動作を表し、後の字が関係のある事物を表し、動作を表す1個の単語を合成する。例えば、出席(出席する)、注意(気を配る)、留神(用心する)、得罪(恨みを買う)、負責(責任を負う)である」(p27)と、丁声樹等(1961)は『動賓式』と呼んで「述目式とは1個の動詞成分に1個の目的語性成分を加えることにより1個の単語を構成することである。例えば、幹事(幹事)、防風(漢方薬の1種)、裹腿(ゲートル)、當中(真中);懷疑(疑う、推測する)、動員(説得する)、得罪(恨みを買う)、負責(責任を負う);有限(わずかである)、無効(無効である)、凭空(いわれもなく)、徹底(どこまでも)、因此(このために)がある」(p220)と、胡裕樹等(1979)は『支配式』と呼び「語根の間に支配と被支配の関係がある。この種の単語は前の語根が動作あるいは行為を表し、後の語根は動作あるいは行為に支配される対象を表す。例えば、帶頭(率先する)、動員(説得する)、簽名(サインする)、耐勞(労苦に耐える)、示威(デモをする)、舉重(重量挙げ)、傷心(悲しむ)、吹牛(ホラを吹く)、知己(親交がある)、

監工（工事を監督する）、司令（司令官）である」（p225）と、張静等（1980）は『動賓式』と称して「司令（司令官）、將軍（將軍）、幹事（幹事）、管家（執事）、動員（説得する）、革命（革命する）、出席（出席する）、留神（用心する）、滿意（うれしく思う）、失望（落胆する）、注目（眼を向ける）、站崗（見張りに立つ）、超群（抜群である）、安心（気持ちが落ち着く）、缺徳（ろくでない）、埋頭（専心する）、生氣（怒る）、探親（親戚回りをする）。このような合成語においては、2個の語根は支配と被支配の関係があり、前の語根が動作を表し、後の語根が動作の対象である。それらの構成方式は述目句に極めて似ている」（p93）と、黄伯荣等（1980）は『述賓型』と称して「前の語根が動作、行為を表し、後の語根が動作、行為に支配干渉される事物を表す。また述目型と呼ばれる。例えば、司機（運転手）、頂針（ゆびぬき）、理事（理事）、管家（執事）、司令（司令官）、站崗（見張りに立つ）、舉重（重量挙げ）、注意（気を配る）、起草（草稿を書く）、動員（説得する）、掛鉤（関係・コネをつける）、有限（わずかだ）、幹事（幹事）、裹腿（ゲートル）である」（p224）と、朱德熙（1982）は『述賓式』と称して「名詞：主席（議長）、將軍（將軍）、防風（漢方薬の1種）。動詞：列席（列席する）、關心（関心を持つ）、動員（説得する）、出版（出版する）、告別（別れを告げる）。形容詞：討厭（嫌いだ）、滿意（うれしい）、衛生（衛生的だ）、無聊（つまらない）。副詞：到底（あくまで、とうとう）、照舊（相変わらず）」（p32）とそれぞれ例語を挙げて説明している。

V-4-3 述補式合成語

前の語素が中心語（述語・被補充語）で、後の語素が前の語素を補充する補語という関係で結合した合成語である。1960年代以降に確立された概念である。

張志公等（1959）は「主従式の単語は、2個の字が並列されたものではなく、その中の1字が主体であり、他の1字が主体となっているその字を修飾、制限あるいは補充しているものである。例えば、立正（気を付け＝正しく立つ）、拡大（大きく広げる）、縮小（小さく縮める）、説明（話して明らかにする）である。これらの単語は前の字が動作を表し、後の字が動作の結果を補充説明し、合体して1個の単語になっている」（p26）と、丁声樹等（1961）は『動補式』と称して「述補式は1個の動詞性成分に1個の補語性成分を加えて1個の単語を構成することである。例えば、證明（証明する）、推翻（覆す）、擴大（拡大する）、縮小（縮小する）、更正（訂正する）、推廣（推し広める）、降低（下がる）、提高（向上する）である」（p220）と、胡裕樹等（1979）は『補充式』と称して「語根の間には補充して説明するという関係がある。この種の単語は通常は後の語根が前の語根を補充説明し、語義全体の構成において、最初の成分が主体である。例えば、認清（はっきり見分ける）、説明（説明する）、改正（是正する）、打倒（打倒する）、提高（向上する）、抓紧（ゆるがせにしない）、看透（見抜く）、変成（～に変わる）、降低（下がる）、推翻（覆す）、煽動（おだてる）、縮小（縮小する）である」（p225）と、張静等（1980）は『偏正式』と称して「推翻（覆す）、打倒（打倒する）、立正（直立する）、提高（向上する）、擴大（拡大する）、縮小（縮小する）、説明（説明する）；車輛（車両）、船隻（船舶）、

馬匹 (馬の総称)、紙張 (紙類)、物件 (物件)、布匹 (布類)、文件 (公文書)。あるものは「推翻」や「車輛」のように中心的語根が前にあり、付加的語根が後にある。このような合成語の構成方式は主従句と極めて似ている」(p93)と、黄伯栄等 (1980) は『補充型』と称して「後の語根が前の語根を補充説明し、前の語根が主体であるものを、ある人はそれを補充型と呼んでいる。例えば、a. 提高 (向上する)、説服 (説得する)、推翻 (覆す)、立正 (直立する)、闡明 (解明する)、壓縮 (圧縮する)、摧毁 (打ち砕く)、推廣 (普及させる)、延長 (延長する)、改進 (改善する)。b. 車輛 (車両)、書本 (書籍)、馬匹 (馬の総称)、槍支 (銃器)、人口 (人口)、紙張 (紙類)、花束 (花束)、花朵 (花びら)、船隻 (船舶)、房間 (部屋)。a 組の合成語は前の語根が動作を表し、後の語根が動作の結果を補充説明している。b 組の合成語は前の語根が事物を表し、後の語根が事物の単位を表している」(P224)と、朱德熙 (1982) は『述補式』と称して「述補式；動詞：革新 (新しくする)、改良 (改良する)、證明 (証明する)、擴大 (拡大する)、降低 (下がる)、推翻 (覆す)、削弱 (弱める)、扭轉 (方向転換する)、記得 (覚えている)」(P33)とそれぞれ例語を挙げて説明している。

V-4-4 修飾式合成語

前の語素が修飾語的成分であり、後の語素が被修飾語的成分という関係で結合した合成語である。この構造は早くから指摘され、1960年代には修飾式から補充式 (= 述補式) が分離独立した。以下にその変遷を見る。

金兆梓 (1922) は『主従式』と呼び「主従式の結合は、「加詞 (付加語)」+「本詞 (中心語)」の単純なある種の関係である」(P46)と、高名凱 (1949) は「規定結構的複合詞構詞法 (修飾構造的合成語構語法)」と称して「2個あるいは2個以上の単語に修飾関係が発生したために合成語を構成したものは、修飾関係的合成語構語法という。例えば、「紅」と「花」はともに独立した単語であるが、「紅花」という構造においては、「紅」が「花」を修飾して、「花」に制限を与え、そのため、それは他の花ではなく、「紅花 (赤い花)」となるのである。「紅」と「花」の間に修飾関係が発生したため、この2個の単語が構成するものは修飾構造の複合語『紅花 (チベット産植物の1種)』である」(P100)と、張志公等 (1959) は『偏正 (主従) 式』と称して「前の字が後の字を修飾、制限したり、あるいは後の字が前の字を補充したり、このようにして構成された合成語は主従式の合成語である。例えば、火車 (汽車)、汽車 (自動車)、電車 (電車)、馬車 (馬車)；皮鞋 (皮靴)、布鞋 (布靴)、草鞋 (わらじ)、膠鞋 (ゴム靴)；國徽 (国章)、國旗 (国旗)、國家 (国家)、國土 (国土)；電燈 (電灯)、電報 (電報)、電影 (映画)；血紅 (血のように赤い)、雪白 (雪のように白い)、爛熟 (よく煮えている、精通している)、滾熱 (非常に熱い)；粉碎 (粉砕する)、前進 (前進する)、微笑 (ほほ笑む)、朗讀 (朗読する) である」

(P26)と、丁声樹等 (1961) は『偏正式』と呼び「修飾式は1個の修飾成分が被修飾成分の前に加えられ1個の単語を構成することである。例えば、火車 (汽車)、電話 (電話)、大衣 (オーバー)、西紅柿 (トマト)、燒餅 (食物の1種)、掛麵 (干しうどん)、照片 (写真)、探照燈 (サ

一チライト)、重視(重視する)、小看(軽蔑する)、武斷(独断的だ)、堅持(堅持する)、冰涼(非常に冷たい)、雪白(雪のように白い)、火熱(火のように熱い)である」(P219)と、胡裕樹等(1979)は『附加式』と称し「語根の間には付加されて修飾されるという関係がある。この種類の単語は通常前の語根が後の語根を修飾制限し、しかも語義全体の構成において、後の語根が主体となっている。例えば、紅旗(赤旗)、草剛(下書き)、壁畫(壁画)、内部(内部)、駱駝毛(駱駝の毛)、粗心(不注意である)、熱愛(熱愛する)、筆談(筆談する)、晚會(イブニング・パーティ)、深入(深く立ち入る)である」(P224-225)と、張静等(1980)も『偏正式』と名づけ「(例語省略)この種の合成語においては、2個の語根の間には附加と被附加の関係がある。あるものは「火車(汽車)」や「熱愛(心から愛する)」などの様に中心的語根が後にあり、付加的語根が前にある。またあるものは「推翻(覆す)」や「車輛(車両)などのように中心的語根が前にあり、付加的語根が後にある。この種の合成語の構成方式は主従句に極めて似ている」(P93)と、黄伯榮等(1980)は『偏正式』と称し「前の語根が後の語根を修飾、制限し、後の語根の意味が中核である。例えば、課桌(勉強机)、電車(電車)、象牙(象牙)、鹿茸(漢方薬の1種)、湘繡(湖南産刺繡)、外科(外科)、密碼(暗号電報)、宣紙(安徽省宣城産の画仙紙)、越劇(浙江省の地方劇)、彩綢(色絹)、新聞(ニュース)、長江(揚子江の正式名称)、密植(密植する)、游擊(遊撃する)、函授(通信教育する)、筆談(筆談する)、火紅(真っ赤である)、雪白(雪のように白い)、筆直(筆のように真っ直ぐだ)、鳥瞰(鳥瞰する)、狐疑(疑り深い)」(P224)と、朱德熙(1982)は『偏正式』と呼び「名詞：飛機(航空機)、優點(長所)、蛋白(卵の白身、蛋白質)、意外(意外な事故)、紙張(紙類)。動詞：重視(重視する)、熱愛(心から愛する)、回憶(回想する)、空襲(空襲する)、中立(中立する)。形容詞：自私(利己的だ)、冰涼(氷のように冷たい)、滾熱(非常に熱い)。副詞：至少(少なくとも)、未免(～のきらいがある)。接統詞：不但(～ばかりでなく)」(p32-33)とそれぞれ例語を挙げて説明している。

V-4-5 連合式合成語

2個以上の語素が対等の資格で結合した合成語である。以下その定義の変遷を見ていこう。

金兆梓(1922)は『衡分(平衡)式』と命名して「平衡式の結合は、2個が並立している関係であり、その中はまた3小グループに分けられる。(子)2個の相同じ字が相結合したもので、我々はそれを「疊詞(疊音語)」と呼ぶ。(丑)2個の性質が相近い字が相結合したものは、我々はその属性が相同じであることにより、説明の便宜のため、それを「屬詞(類義語素連合語)」であると呼ぶ。(寅)2個の性質が相反する字が相結合したものは、我々はそれを「反詞(反義語素連合語)」であるという。平衡式結合字；疊音語：人人(だれもかも)、處處(どこでも)。類義語素連合語：禮儀(儀礼)、德行(道義に合致した振る舞い)。反義語素連合語：行止(行先、品行)、陰陽(陰陽)」(P47)と、呂叔湘(1942)は『聯合式』と称し「連合関係は、もし密接であれば、2個の単語を1個の複合語に合体させる。これがすなわち連合式の合成語であ

る。上記の「姉妹 (姉妹)」と「妯娌 (兄弟の妻の総称)」この2単語の間は聯合関係であり、しかもこの2単語それ自身もまた連合式の合成語である。その他「餅餌 (小麦粉や米粉等を水で溶いて焼いた食品の総称)」、「豊満 (満ち満ちている)」、「卓詭 (奇異な)」、「變幻 (激しく変わる)」等もまたすべて連合式合成語である」(p19)と、高名凱 (1949) は『並列結構的複合詞構詞法 (連合構造的合成語構語法)』と称して「2個あるいは2個以上の単純語に並列関係が発生したことにより、合成語を構成したものは、連合構造的合成語構語法という。例えば、「大」と「小」は2個の対立する単語であるが、両者が同等の地位に置かれて、結合することができれば、そこで、「大」と「小」が連合することにより生まれた新しい単語「大小 (大きさ)」こそ、別の1個の単語であり、しかも合成語になったのである。いわゆる並列とは必ずしも対立する単語ではなく、ただ構造内部において同等の文法的機能を占有するものでありさえすれば、結合して、合成語を構成できるのである」(p100)と、張志公等 (1959) は『聯合式』と称して「意味が相同じあるいは相近い2個の字、あるいは意味が相反する2個の字が一つに並列されて構成された合成語は連合式の合成語である。例えば、皮膚 (皮膚、肌)、戲劇 (演劇)、器具 (器具、調度)、朋友 (友達)、生産 (生産する)、戦闘 (戦う)、幫助 (助ける)、慶祝 (祝う)、豊富 (豊かだ)、奇怪 (おかしい)、美麗 (きれいだ)、寛闊 (広い)、暖和 (暖かい)、誠實 (まじめだ)」(p25)と、丁声樹等 (1961) は『並列式』と称し「並列式には2種類ある。1種類は意味が相同じあるいは相近い成分を一つに並列して1個の単語を構成するものである。人民 (人民)、朋友 (友達)、語言 (言語)、文字 (文字、文章)；生産 (生産する)、闘争 (戦う)、請求 (申請する)、計算 (計算する、思案する)；偉大 (偉大だ)、勇猛 (勇猛だ)、精細 (精密だ)、奇怪 (おかしい)；全都 (すべて)、稍微 (わずかに)、或許 (あるいは)、剛纔 (今しがた)である。他の1種類は意味が相対するあるいは相反する成分を一つに並列して1個の単語を構成するものである。例えば、大小 (大きさ)、長短 (長さ)、高低 (高さ)、是非 (是非、いざこざ)；上下 (事物の上下、地位等の上下)、左右 (左右、そば)、彼此 (両方、互い)；反正 (どのみち)、遲早 (早晚)、開關 (電気のスイッチ)、賣買 (商売)である」(p219)と、胡裕樹等 (1979) は『聯合式』と称して「2個の語根が並列融合して構成される。2個の語根の意味関係により2種類に分けられる。1種類は同義語根の結合であり、他の1種類は反義語根の結合である。前者の例は第1組：語言 (言語)、智慧 (知恵)、思想 (思想、考え)、群衆 (大衆)、圖画 (図画)、源泉 (源泉)、形態 (形態、ありさま)、眞實 (眞実)、學習 (学ぶ)、生産 (生産する)、闘争 (戦う)、迷惑 (戸惑う)、捨棄 (捨てる)、閱讀 (読む、講読する)、掩飾 (粉飾する)。第2組：江湖 (世の中)、手足 (手足、兄弟)、矛盾 (矛盾)、綫策 (手がかり)、山水 (山水、風景)、筆墨 (文字や文章)、眉目 (顔かたち)、皮毛 (毛皮の総称、上っ面の知識)。第3組：國家 (国家)、兄弟 (兄弟、弟分)、乾淨 (清潔だ)、窗戶 (窓)。意味的側面から言うと、第1類単語の2個の語根の意味は並列された、対等なものである。しかしまた異なるケースが存在する。第1組単語の2個の語根は意味上において完全に平等なものであり、互いに説明し合い、注釈し合っ

いる。第2組単語は2個の語根が結合することによってそれらの原義と関係があるが、しかしさらに抽象的で概括的な意味を表している。この種の単語は語根の字面から意味を解釈してはならない。第3組単語の意味は通常その中の1個の語根を基盤とし、他の語根の意味はあるいは完全に消失し、あるいはただ付加的に際立たせる役割を果たしているに過ぎない。反義語語根が連合して構成される単語には次のものがある。高低(高さ、優劣)、早晚(朝晩、遅かれ早かれ)、始終(終始)、東西(東西、品物)、利害(損得、ひどい)、往來(通行する、交際する)、伸縮(伸縮する)、長短(長さ、長所と短所)、是非(是非、いざこざ)、反正(どのみち)、横豎(どうせ)、開關(スイッチ)、收發(受領と発送)、動靜(物音、様子)。この種の単語の意味は一般的にいずれも比較的抽象的であり、直接的に語根から見出すことができない。応用と理解に際しては字面だけを見て当て推量で解釈すること避けるように心配りしなければならない」

(p224) と、張静等(1980)は『聯合式』と称して「(同義語根、類義語根、反義語根の3種類に分けた37例語省略) この種の合成語は2個の意味が相同じ、相近いあるいは相反する語根が連合して構成されたものである」(p92) と、黄伯榮等(1980)は『聯合型』と呼んで「連合型、2個の意味が相同じ、相近い、相関連するあるいは相反する語根が並列的に結合してできたものである。(同義、類義関連、反義の3種類に分けた27例語は省略)」(p223-224) と、朱徳熙(1982)は『聯合式』と称して「連合式。名詞：音樂(音楽)、道路(道路)、賣買(商売)、法律(法律)。動詞：調查(調査する)、安慰(慰める)、重疊(重複する)、可能(できる)。形容詞：奇怪(おかしい)、透徹(透徹している)、光明(光り輝く)、特殊(特別だ)。副詞：根本(まったく、完全に)、千万(是非とも)。前置詞：自從(から)。接統詞：而且(その上、しかも)、並且(並びに)、因爲(～なので、のために)」(p33) とそれぞれ例語を挙げて論じている。

V-4-6 付加式合成語

付加式合成語とは1個の語根に1個の接辞が付加されて構成された合成語を言う。以下にその諸定義を見ることにする。

高名凱(1949)は『付加成分』と称し「声調の形態変化以外に、中国語にも付加成分の添付と母音・子音の置換を応用するところがある。付加成分の添付は現在の構語法に出現しており、また実詞の若干の文法的機能変化にも現れている。……前置成分と後置成分の添付はいずれも中国語構語法上で応用されている形態である。中国語構語法で用いられている前置成分あるいは接頭辞の例を数例挙げる。(一)「阿」を接頭辞とするもの：阿三(サル、西洋人の召使)、阿媽(おばちゃん)、阿真(おかあちゃん)；(二)「老」を接頭辞とするもの：老王(王さん)、老高(高さん)、老爺(おじいさん)、老龍(竜神)。……中国語構語法上で応用されている後置成分あるいは接尾辞の例を数例挙げる。(一)「頭」を接尾辞とするもの：喫頭(食べ応え)、玩頭(遊び)、説頭(話し甲斐)、差頭(違い)、罰頭(罰)、來頭(来歴、身分)；(三)「子」を接尾辞とするもの：李子(スモモ)、桃子(桃)、杏子(アンズ)、瓜子(ウリ)、子(狂人)、麻子(あばた)、小子(子供)；(三)「兒」を接尾辞とするもの：白面兒(ヘロイン)、刑兒(強

さ)、小人兒(若いもの)、明兒(あした)、頭兒(切れ端、親分)、信兒(便り)；(四)「者」を接尾辞とするもの：工作者(従事者、関係者)、説者(話し手)、聽者(聞き手)、來者(未来)、買者(買い手)、賣者(売り手)、行者(通行人、行者)、侍者(召使)、尊者(尊者) (p95-96)と、張志公等(1959)は特に名称をつけずに「合成語の中にはさらに比較的特殊な構語方式が1種類ある。例えば、果子(果物)、帽子(帽子)、鼻子(鼻)、籃子(籠)、棍子(棒)；剪子(はさみ)、鉗子(ペンチ)、擲子(はたき)、胖子(デブ)、瘦子(ヤセギス)。これらの単語においては、ただ前の字のみが実在的な意味を表し、後の「子」はいずれも軽声に読まれ、実在的な意味を表していない。だが、この「子」という字は極めて用途があり、それはこれらの単語が名詞であり、およそ「子」を帯びた単語はすべて名詞であることを表す。それはさらに動詞あるいは形容詞を名詞に変えることができる。例えば、「剪」「鉗」「擲」は動詞であるが、「子」を加えると、「剪子」「鉗子」「擲子」は名詞になってしまう。「胖」「瘦」は形容詞であるが、「子」を加えると、「胖子」「瘦子」も名詞になる。ある単語の品詞を表示できることはある種の文法的機能である。「子」にはこのような機能があり、また文法的に言えば、それには一定の意味がある。「子」の機能と類似したものには「兒」と「頭」があり、「頭」は普通軽声に読まれ、「兒」は直前の音節と合体して(単音節語として)読まなければならない。例えば、芽兒(草木の芽)、鳥兒(小鳥)、畫兒(絵画)、亮兒(明かり)尖兒(トンガリ)；木頭(丸太、材木)、石頭(石コロ)、饅頭(マントウ)、骨頭(骨、人柄)、罐頭(缶詰)。「子」「兒」「頭」のような文法的機能のある字は構語法上の補助成分という。さらにある合成語は補助成分「者」「家」「員」「性」「化」で構成されたものである。例えば、讀者、作者、學者、記者；作家、畫家、專家(専門家)、職員、教員、演員(俳優)、宣傳員；硬性(融通の利かない、変更できない)、彈性、積極性、創造性；美化、綠化、工業化、機械化である」(p28)と、丁声樹等(1961)は【付加式】と称して「1個の基本成分に接頭辞や接尾辞に類似した付加成分を加えて1個の単語を構成するものは付加式という」(p220)と、胡裕樹等(1979)は【付加成分】という術語を用いて「語根に接辞が連結されて構成された合成語は、その中心的部分は語根であり、接辞は付加的部分で、ただある種の付加的意味を表すにすぎない」(p221)と、張静等(1980)は【綴加式】という術語を用いて「(接頭辞的な「老、小+姓、第、初(初三)、可、打(打聽)、相、非、本、分、總、所+V」；接尾辞的な「性、率、度、於、裏、麼、處、然、化、員、家、們、了、着、過、A巴巴、A乎乎」；接中辞的な「A裏AB、V得C、V一V、V了V」のそれぞれの例語を30数個挙げた後)この種の合成語は1個あるいは2個の語根に接辞を加えて構成されたものである。「老」「可」「總」などの様に語根の前に加えられた接辞は接頭辞という。「性」「然」「家」「巴巴」などの様に語根の後に加えられた接辞は接尾辞という。「裏」「得」「一」「了」などの様に2個の語根の中間に加えられた接辞は接中辞という」(p93-94)と、黃伯榮等(1980)は【付加式】という術語を用いて「1個の具体的語彙の意味を表す語根と1個のある種の付加的意味を表す接辞によって構成される。(1)接頭辞+語根(例語は「老、第、小、阿」各2語を挙げる)；(2)語

根+接尾辞（例語は「子、頭、兒、性、者、化」各数語を挙げる）」(p225) と、朱徳熙 (1982) は『付加』と言う術語を用いて「接辞が語根に付着する構語方式は「付加」という。例えば、「站着（立っている）」「桌子（テーブル）」「我們（私達）」では「着」「子」「們」が接辞であり、「站」「桌」「我」が語根である」(p28) とそれぞれ例を挙げて説明している。

V-4-7 重複語

語根が重ねられて構成された合成語である。以下に諸定義を見ることにする。なお術語はいずれも『重疊（式）』を用いている。

丁声樹等 (1961) は「1字あるいは2字を重ね合わせて1個の単語を構成するものを、重疊式という」(p226) と、張静等 (1980) は「最初に名詞、量詞、動詞、形容詞等の重ね型=AA, ABAB, AABB の例を20数語挙げているが省略する）この種の単語は語根を重ね合わせて構成されたものである。「人人（あらゆる人、だれでも）、件件（あらゆる事柄・衣服・公文書等）」などの様にあるものはあらゆるものを指し示す。「杠杠兒（棺桶を担ぐ）、坑坑窪窪（でこぼこしている）、日日夜夜（毎日毎晩）」などのようにあるものは小さいこと、愛らしいこと、多いこと、多種多様なことを表す。「坐坐（ちょっと座ってみる）、挪動挪動（ちょっと動かしてみる）」などの様にあるものは試行あるいは短時間の動作を表す。また「滾滾爬爬（転がったり這いつくばったり）、打打鬧鬧（ふざけ騒ぐ）」などの様にあるものは動作が乱雑であったり不真面目であることを表す。また「紅紅（とても赤い）、大大方方（とても気前がよい、鷹揚である）」などの様にあるものは程度の軽減あるいは加重を表す」(p94) と、黄伯榮等 (1980) は「2個の相同じ語根が相重ねることにより構成される。例えば、姐姐（姉さん）、哥哥（兄さん）、爹爹（おとうちゃん、おじいちゃん）、僅僅（わずかに……だけ）、偏偏（どうしても、あいにくと、だけ）、剛剛（ちょうど、たった今）である」(p226) と、朱徳熙 (1982) は「重複が指し示すものは媽媽（お母さん）、看看（ちょっと見る）、個個（一個一個、清清楚楚（とてもハッキリしている）類の単語の構成方式である。「媽媽」は「媽」の重複によってできたものである。我々は「媽」が「媽媽」の基本形であり、「媽媽」が「媽」の重複形であるという」(p27) とそれぞれ説明している。

V-4-8 略語

略語にはいずれも『簡稱』の術語を用いている。以下に諸定義を見てみよう。

呂叔湘 (1942) は「複合語と相反するものが「略語」である。例えば「川」は「四川」の略語である。略語は合成語の趨勢と相反するようであるが、実際は略語はかえって合成語が発達した結果である。なぜならば、合成語が多くなってはじめて略語が必要となり、しかももし合成語がなく、1語が1字であれば、簡略化しようとしても簡略化できないからである。略語の例は次のとおりである。すなわち；北大=北京大學、教部=教育部(教育省)、校委會=校務委員會(教学委員會)、蘇聯=蘇維埃社會主義共和國聯盟(ソ連邦)」(p14) と、張志公等 (1959) は「言語には略語があり、ある名称の中から数個の字を切り取って構成するものである。例え

ば、「中國共產党中央委員會」の略称は「中共中央」であり、「共產主義青年團」の略称は「共青團」などである。略語の構成方式は多種多様なものである。あるものは「北京大學」を「北大」と略し、「初級中學」を「初中」と略すように、各単語の最初の字を採用する。またあるものは「外交部長(外務大臣)」を「外長」と略し、「軍人家屬(家族)」を「軍屬」と略すように、ある単語の最初と最後の各1字を採用している。またある略語は「人民代表大會」を「人大」と略し、その中の「代表」という単語からは1字も採取しない。また「中國人民政治協商會議」を「政協」と略し、「中國」「人民」「會議」の3語から1字も採用しないというように、名称の中のある数語の中の字だけを採用し、各単語から各1字ずつ採用していないものもある」(p30)と、丁声樹等(1961)は「略語の中で最も一般的なものは名称として用いられている句の中から各単語の最初の字を取り出して一つに結合させたものである。例えば、中共(中國共產党)、北大(北京大學)、土改(土地改革)、文教(文化教育)、勞模(労働模範)、高中(高級中學=高校)、政委(政治委員)、科技(科學技術)。この種の略語は2音節語が多数を占めている。時にはあるとても長い名称は2個の重要な字を取り出して略語を構成することもある。例えば、「蘇維埃社會主義共和國聯盟」の略語は「蘇聯」である」(p228)と、胡裕樹等(1979)は「現代中国語の句、とりわけ事物の意味を表す句は、その中の数個の成分を抽出して略語を構成することができる。これは往々にして句が短縮されて新語を構成する過程である。例えば、整頓作風(仕事や任務のやり方を改善する)=整風、掃除文盲=掃盲、安全理事会=安理会、少年先鋒隊(共產主義青年團の下部組織)=少先隊である」(p227)と、張静等(1980)は「言語にはある種の略称があり、大多数は句を縮小してできたものである。略語の構成方式は大体以下の2種類ある。1種類は句の数個の単語から比較的重要な語根を選び出すという「重点的削減」である。例えば、共產主義青年團=共青團、高級中學=高中、人民代表大會=人大、常務委員會=常委會、軍人家屬=軍屬、南京大學=南大、外交部長=外長、政治協商會議=政協である。他の1種類は句中に並列された単語あるいは語根を数個の字で概括するという「概括的縮小」である。例えば、父親、母親=双親、百花齊放、百家争鳴=双百、身体好、學習好、工作好=三好、春季、夏季、秋季、冬季=四季、梁代、唐代、晋代、漢代、周代=五代である。すでに「高中」「四季」のように定型化された略語は、合成語と見なしてよい。「人大」は「人民代表大會」を指すこともできれば、また「人民大學」を指すこともできる、特になお多義語的である略語は、句と見なさざるをえない」(p94)と、黄伯榮等(1980)は「略語とは事物の名称あるいは固定句が簡素化された単語である。略語はもともと簡略化されていない言語単位に対して言うものである。言語を縮小して略語となるには以下の数種類の方式がある。: 1. 各単語の最初の語素を残す。例えば、知識青年=知青、労働模範=勞模、科學技術=科技、旅行游覽=旅游。2. 前の単語の最初の語素と後の単語の最後の語素を残す。例えば、外交部長=外長、軍人家屬=軍屬、整頓作風=整風、掃除文盲=掃盲。3. 2語の中の相同じ語素を1個だけ省略する。例えば、工業、農業=工農業、理科、工科=理工科、病害、虫害=病虫害、教員、職

員＝教職員。4. 名称中の代表的な語素あるいは単語を選び出す。例えば、中國共産党中央委員会＝党中央・中共中央、中國人民政治協商會議＝政協、人民代表大會＝人代会・人大、聯合國安全理事會＝安理会である」(p227)と、朱徳熙(1982)は「最後にある特殊な合成語、すなわち通常言うところの略語について少し述べておく。例えば、土改＝土地改革、抗戦＝抗日戦争、執委會＝執行委員會、北大＝北京大學、指戦員＝指揮員＋戦闘員、中小學＝高校＋中學＋小學校、噴氣式＝噴氣式飛機、超音速＝超音速飛機、清華＝清華大學である。「噴氣式」「超音速」「清華」は全称の一部分を切り取って略語にしたのであり、「土改」「抗戦」等とは異なる。前者は「減縮式」合成語であり、後者は「緊縮式」合成語である。時にはこの2種類の方法は同一の1個のパターンに用いられることができる。例えば、「北京大學付屬中學」はまず緊縮して「北大附中」とし、しかる後さらに減縮して「附中」とする。(勿論このような言い方では北京大學の範囲内でしか人に理解させることしかできない)」(p35)とそれぞれ例を挙げて説明している。

VI 結語

前節において煩瑣を厭わずに語素の種類とその構造、単純語については音素の結合構造と表す意味を中心にし、さらに複合語については語素の結合構造、つまり構語法を中心にして、それぞれ分類して現在までの術語とその諸定義や説明を考察してきた。以下にそれらを総括しながら、現代中国語教学文法における語素と単語のガイドラインを提起して結語としたい。まず全般的な傾向としては【字】が【詞素(語素)】および【詞(単語)】の両概念と弁別されるにはやはり1940年代になってからであり、まず【字】と【詞】との差異がおぼろげながら認識されたが、しかし厳密に【詞】についての科学的な定義が下されるには1950年代半ばの単語認定論争を待たねばならなかった。王力(1943)ですら「2個の【詞】が複合して出来たものであるので、我々はそれらを【複合詞】と称する」(p10)といている。これでは合成語と句との区別ができなくなる。それに故に張志公等(1959)に代表される当時の中学生と対象とする教学文法では語素と単語を峻別せずに【字】という術語を用いて説明していた。例えば先に見たように「2個あるいは2個以上の【字】で構成する単語は、それぞれの【字】がいずれも若干の意味を表し、合体して1個のまとまった意味を表すものは、合成語という」(p24)と述べている。だが1980年前後から出版された大学生を対象とする教学文法ではそれまでの成果を吸収して、語素と単語、単純語と合成語、合成語と句の差異を峻別していることはIVとVにおいて見た通りである。なお例語はVに十二分に挙げているので、この章では省略している。

VI-1 語素

語素の術語には【詞素】と【語素】の用語が用いられていたが、日本における教学文法では

やはり『語素』を活用することを提起する。語素の種類については『詞根・不定位詞素(語根)』と『詞綴・定位詞素(接辞)』にまず分類され、ついで『詞綴』は『前附号・詞頭・前綴(接頭辞)』、『詞尾・後附号・後綴(接尾辞)』と『中綴(接中辞)』に分類されていた。しかし語根の分類はただ朱徳熙(1982)のみが提起しているだけであるが、単語と語素を峻別する上で必要な概念である。つまり『成詞語素』と『不成詞語素』という概念を導入すべきと考える。つまり語根には単独で単語となれるものとなれないものに二大区分すべきである。これはひいては語根について単音節単純語になる語根と単音節単純語になれない語素を峻別しうることが教学上可能にするからである。ただ『不成詞語素』には単語になれない語根と接辞全体が包含される、つまり語根と接辞が同居する概念なので、それは採用しない。また朱徳熙(1982)の『自由語素』『粘着語素』についてもIV-1で論及したように採用しない。従って語素の説明は次のようにしたい。

語素は単語を構成する、最小の意味を有する言語単位である。語素は語根と接辞に分けられる。語根はさらに単独で単語となり得ると同時に他の語素と合成語を構成しうる「自由語根」と単独で単語となれずに他の語素と合成語を構成する「粘着語素」に分けられる。接辞は合成語構成の際の置かれる位置により「接頭辞」「接尾辞」「接中辞」の3種類に分けられる。語素は基本的には単音節であるが、複音節の語素はその大部分が古代中国語から存在してきた単純語の「連綿語(双声語・疊韻語・非双声疊韻語・重音語を包含する)」と「音訳外来語」として存在する。

VI-2 単音節語と複音節語

音節数による単語の分類には、まず単音節のものには『単音綴詞・単音詞・単音節詞』の術語が使用されているが日本語では「単音節語」を使用したい。次に2音節以上のものについては『複音綴詞・多音詞・複音詞・多音節詞』の術語が使用されているが、日本語では「複音節語」を使用したい。また先にも見たように中国語には2音節語が多いのでそれには『双音詞(2音節語)』、3音節以上のものには『多音詞(多音節語)』と複音節語を区分しているが、次のように説明したい。

中国語の単語はその音節数により、1音節からなるものは「単音節語」といい、2音節以上で構成されるものは「複音節語」という。現代中国語では2音節の単語が多い。

VI-3 単純語と合成語

表す意味内容による分類には、まず単純なものには『単詞・単純詞』という術語が用いられているが、日本語では「単純語」を使用したい。複雑なものには『複詞・合義的複詞・複合詞・合成詞』で表しているが、日本語では「合成語」を使用したい。しかし朱徳熙（1982）は2個以上の語素で構成された単語を『合成詞』と称しているが、さらに2個以上の語根が主述、述目、述補、修飾、連合などの統語論的關係で結合したものを特に『複合詞』と称して区別していることに注目しておく必要がある。さらにその内容は諸定義から帰納して、1個の語素（自由語根のみ）からなるものが単純語、2個以上の語素（自由語根、粘着語根と接辞を含む）からなるものが合成語と定義し得るので次のように説明する。

中国語の単語はその意味内容により、1個の語素からなる単語を「単純語」といい、2個以上の語素からなる単語を「合成語」という。なお単純語はその大多数が単音節語であるが、「連綿語」「音訳外来語」等のみが複音節語である。また2個以上の語素からなる単語を「合成語」という。なお合成語はそのほとんど大部分が複音節語であるが、「1個の語根+兒（接尾辞）」の合成語のみが単音節語である。

VI-4 単純語の種類

単純語は先にも述べたように単音節単純語が大多数であるが、それ以外に次のような複音節単純語があることを見てきた。すなわち、前後2個の音素の声母が同一なものを『双聲状字・双聲・双聲詞』と、また韻母が同じものを『疊韻状字・疊韻詞・疊韻』と、韻母・声母とも同じでないものを『非双聲疊韻』と、同一字を重ねたものを『重言・疊詞・疊字・疊音詞』とそれぞれ称しているが、術語の中に『詞』を用いているものが少ない。またそのほとんどが古代中国語から存在してきたので、古代中国語文法を対象とした馬建忠（1898）や金兆梓（1922）でも論及している。ただ同一字を重ねた「重字語」は古代中国語の書面語のものに限定すべきである。現代中国語における「重字語」は単純語ではなく、合成語の一種である。またそれらを総称する術語として『聯綿字・單純性的複音綴詞・純粹的多音詞・聯綿詞』を使用しているので、それらを「双声連綿語」「疊韻連綿語」「非双声疊韻連綿語」「重字連綿語」と日本語で総括することにする。さらに外来語を音訳したものを『譯音詞・譯音・音譯的外來語・譯音詞』の術語で表されているので、日本語では「音訳外来語」ということにする。単純語の種類については次のように説明する。

単純語はその音節数により、単音節単純語と複音節単純語に分けられる。複音節単純語はさらに「連綿語」と「音訳外来語」に分けられる。連綿語はさらに前後2個の音素の声

母が同一の「双声連綿語」、韻母が同一の「疊韻連綿語」、声母・韻母とも同一でない「非双声疊韻連綿語」、同一の字を重ねた「重字連綿語」に分けられる。

V-5 合成語の種類

合成語の種類は語素の結合構造によって分けられ、まず語素と語素が統語論的關係で結合した合成語と語素と接辞または同一語素が重ねられた合成語に分けられる。前者はさらに語素が主述關係で結合したものは『句子形式的複合詞構詞法・主謂式・陳述式・主謂型(日本語では「主述式」とする。以下同じ)』という術語を用い、述語動詞とその目的語という關係のものは『引導關係的複合詞構詞法・動賓式・支配式・述賓式(述目式)』、述語動詞または述語形容詞とその補語という關係のものは『動補式・補充式・偏正式・補充型・述補式(補充式)』、修飾語と被修飾語という關係のものは『組合關係・附加關係・規定結構的複合詞構詞法・偏正式・附加式(修飾式)』、語素が對等の資格で結合しているものは『衡分式・聯合式・並列結構的複合詞構詞法・並列式・聯合式・聯合型(連合式)』の5種類に分類される。

後者はさらに「語根+接尾辞」または「接頭辞+語根」で構成された『附加成分・附加式・附加部分・綴加式・附加(付加式)』と同一語素を重ねた『重疊式(重複式)』に分けられる。なお特殊な合成語としては長い名称・専門用語や固有名詞を簡略化した『省称・简称(略語)』がある。合成語の種類については次のように説明される。

合成語はまず語素と語素が統語論的關係で結合したものと語素と接辞または同一語素だけで構成されるものに分けられる。前者はさらに語素が主述關係で結合した「主述式合成語」、述目關係の「述目式合成語」、述補關係の「補充式合成語」、修飾關係の「修飾式合成語」、連合關係の「連合式合成語」に分けられる。後者は「語根+接尾辞」または「接頭辞+語根」構造の「付加式合成語」と同一語素を重ねた「重複式合成語」に分けられる。このほかに特殊な合成語として句構造の固有名詞・専門用語を簡略化した「略語」がある。

基本参考文献

1. 馬建忠(1898): 馬氏文通 初版1898年; 商務印書館1983年版
2. 楊樹達(1920): 高等国文法 初版1920年; 商務印書館1980年版
3. 陳承澤(1922): 国文法草創 初版1922年; 商務印書館1982年版
4. 金兆梓(1922): 国文法之研究 初版1922年; 商務印書館1982年版
5. 黎錦熙(1924): 新著国語文法 初版1924年; 商務印書館1994年版
6. 何容(1942): 中国文法論 初版1942年; 商務印書館1985年版
7. 呂叔湘(1942): 中国文法要略 初版1942-44年; 商務印書館1982年版

中国語の語素と単語（下）（鳥井）

8. 呂叔湘（1979）：漢語語法分析問題 初版1979年；商務印書館1979年版
9. 王力（1943）：中国現代語法 初版1943-44年；商務印書館1985年版
10. 高名凱（1949）：漢語語法論 初版1949年；商務印書館1983年版
11. 張志公等（1959）：漢語知識 初版1959年；人民教育出版社1979年版
12. 丁声樹等（1961）：現代漢語語法講話 初版1961年；商務印書館1979年版
13. 胡裕樹等（1979）：現代漢語 初版1962年；上海教育出版社1979年版
14. 張静等（1980）：新編現代漢語 初版1980年；上海教育出版社1982年版
15. 黄伯榮等（1980）：現代漢語 初版1980年；甘肅人民出版社1983年版
16. 朱德熙（1982）：語法講義 初版1982年；商務印書館1982年版
17. 高更生等（1996）：漢語教學語法研究 初版1996年；語文出版社1996年出版
18. 陸志韋等（1964）：漢語的構詞法（修訂本） 科学出版社1964年版

（本論文は平成12年度学部・機構共同研究費による研究成果の一部である。）